

現代青年の自立性に関する研究 (6) — 交流分析における透過性調整力の高・低と自立・自律性 —

菱田陽子

目 的

菱田ら(2011)を考慮しつつ、現代青年の自立・自律性と想定した TEG 類型と透過性調整力 (Permeability Control power:以下 PC と略記) の高低別類型が、筆者らの自立・自律性因子の特性とどのように関わるのか、どの自立・自律性特性を有する自立・自律類型であるのかを明らかにする。更に、PC が高ければ、自立・自律もしくは非自立・非自律類型に関わらず対人適応・社会適応するという想定にもとづき、この傾向が認められるか否かを検討する。具体的には、各自我状態にもとづく青年の自立傾向を示すと我々が想定した 5 類型、更に PC 値を含む 15 類型と、自立・自律性尺度 8 因子との関係を明らかにする。

方 法

対象 大学生、短期大学生、専門学校生 473 名

手続き 調査実施は 2013 年 7 月。菱田ら(2011)の 36 項目に、「適切な依存」と思われる 10 項目、「不適切な依存(甘え)」と思われる項目 8 項目を追加、計 54 項目(4 件法)からなる項目を自立・自律性尺度として使用。更に透過性調整力とエゴグラムをみるために新版 PC エゴグラム II 型の 70 質問(3 件法)を使用。分析対象は、明らかに不適切な回答をした者を除いた 412 名(平均年齢 18.8 歳)、エゴグラムについては 395 名。

結果と考察

自立・自律性尺度の検討

自立・自律性尺度項目 54 項目について 8 因子解が得られ、依存に関する 2 因子以外、菱田ら(2011)と類似した因子構造を示した。

PC を含む TEG 類型と自立・自律性の関係

PC 値が高ければ非自立・非自律型であっても自立・自律性の様相を示すことを予想したが、「影響受けやすさ」、「対人協調」、「やる気なさ」等をはじめとしていくつかの自立・自律性因子において、

類型間の違いがみられたものの、透過性調整力との明確な関連を示すことはできなかった。但し、自立・自律性尺度の因子得点平均値が、仮に平均値から 1/2 標準偏差以上の隔たりを特徴あるものと考え、統計的有意性は認められないものの、PC 値の高い者は自立・自律性傾向が高いことが窺われる (Table 1)。「CP 優位型」に関しては

Table 1 PC 値を含んだエゴグラム類型別自立・自律性因子得点

	人数	独自性	将来展望	影響受けやすさ	自立認識	自立こだわり	対人協調	やる気なさ	感情非統制
自立・自律類型	NP優位高	12	.637	.951	-.532	.829	.967	-.570	-.717
	FC優位高	20					.501		
	AC優位高	7			-.1.204				-.808
	逆NI高	7			-.757				
	M高	30					.669		
非自立・非自律類型	M低	6					.509		
	CP優位高	5		.824	-.1.190	.760	.721	-1.031	-.703
	CE優位低	5	1.371	.506	-.1.284		.662		
	AC優位高	8			.549				
	AC優位低	27		-.511	.605				.549
非自立・非自律類型	NI低	19		-.738		-.531	.556	-1.100	.966
	NE低位低	12		.701			.766	-.537	
	NI高	28	-.631						
	逆NI高	9			-.531				
	逆NI低	8					-.595	.825	.956
非自立・非自律類型	平均II高	18						-.578	
	C優位低	9	-.548			-.508	-.631		

仮説に反し、PC 値が高い者も低い者も自立・自律傾向を示した。この他、NP を高めることで対人協調の特性を獲得できること、反抗を含んだ従順性 AC の高い自我状態は非自立・非自律の典型であることも確認された。今後の課題として、CP のエゴグラムの解釈 (自分の判断を正しいものとし、批判、非難を行い、目標が高く理想を追求) からも、CP の高さが青年の自立・自律と肯定的に関わっていることも窺われ、これまで青年の自立・自律に関わる自我状態として注目してきた FC と共に CP の関与を調べたい。エゴグラムのパターン数が多く、少数のパターンもあり、有意な差の検討に向けて、今後より多くの標本を対象として検証を重ねる必要もある。加えて、自立・自律性は、甘えの観点も含め、適切な他者依存の特性を含むと考えているが、明確な立証に至っていない。立証が困難である要因も探りつつ、引き続き検討、検証を重ねたい。